

“Women and Wish” フォーラム 2 男女共同参画推進センターの実験研究補助者制度を利用して

2月22日（月）、芝蘭会館別館研修室2にて“Women and Wish”フォーラム第2回「男女共同参画推進センターの実験研究補助者制度を利用して」を開催しました。

始めに、山末 英嗣広報・相談・社会連携事業ワーキンググループ主査の司会で、稲葉 カヨ理事・副学長より開会の挨拶がありました。



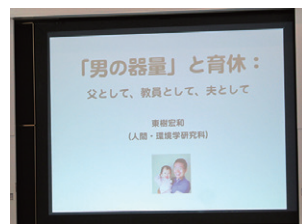
人の科学者として子供たちに安心して暮らせる世界を残すための研究や活動に一層取り組みたいと話しました。また、京都大学には学生を社会に送り出す大学だからこそ先頭に立ってやってほしい、その際、トップダウンとボトムアップをうまくかみ合わせての活動が重要だとの見解を示しました。

次に、東樹 宏和先生（人間・環境学研究科）が「『男の器量』と育休：父として、教員として、夫として」と題し、講演を行いました。



東樹先生は1ヶ月間育児休暇を取得しましたが、直近2年での男性の育休利用としては唯一の利用者だったとのことで、育休だけが全てではないがもっと取得率が上がってほしいと述べました。

育児を通して家事、育児、仕事の両立の大変さを実感し、父親が育児をすることに行政やマスメディアを含めた世間の意識の低さなどを感じたそうで、感じたことなどは個人の情報に留めずに周囲に発信するようにしているとのこと。体のつくりの違いで母親にはどうしてもかなわない部分があることは確かなので、父性をどう積極的に利用するか考え、育休取得など個人の行動を介して社会の未来を変えていく努力をすることや、子供の思春期以降に社会との関わり方を伝える役目をしたいと語りました。また、子を持つ一



次に、佐藤 亨就労支援事業ワーキンググループ主査より、実験補助者制度の現状について説明がありました。費用の限度があり、支給額を下げすぎではいけないと思うと採択数を絞らざるを得ない状況で、採択数は応募の6割くらいの年30件ほどになっています。一時は、申請書類の準備が大変なこともあり、申請自体を諦めてしまう方がいたことは大変残念ですが、少しは改善してきており、国立大学のおかれる厳しい状況の中で頑張っています、と現状を説明し、今回は率直な意見をお聞きしたいと述べました。

その後、実験研究補助者制度の利用者を代表し、小石 かつら先生（白眉センター／人文科学研究所）と竹之内 沙弥香先生（医学研究科）より、お話がありました。



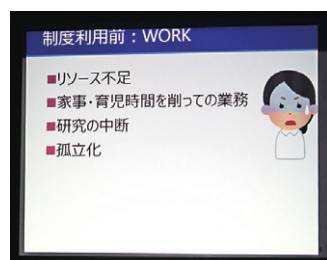
小石先生は、ある男性研究員の奥様が研究者を辞め、専業主婦になったお話を例に出し、本人や周囲も気づいていないかもしれないが、研究者として仕事を続けていく上で、いろいろな障害に心が折

れてしまうということも考えられると話されました。先生も実験研究補助者制度の申請の際は、ここまでしないといけないうらいやめたらいいじゃないか、という気持ちになったそうです。研究者を続けることでパートナーに制限をかけてしまう、迷惑をかけてしまう、保育所が見つからない、一方で私が仕事をしなくても周囲に反対する人はいない、制度を使うわけでもない、迷惑をかけるわけでもない、研究さえやめれば問題は解決してしまう。研究者として消えることにハードルはないが、続けることに関してはハードルがたくさんある。その中で、実験補助者制度はただ助かるという意味以上に、自分の研究に価値があると思わせてくれる、研究者としての存在そのものを支えてもらえる精神的にも有難いものであったし、今後も続けていってもらいたいと述べました。ただ、採択率6割の現状は悲しいことであるとし、諦めて申請しない人の気持ちもわかるので申請に対するサポートがあればいいと意見を述べました。



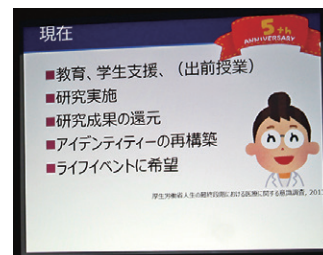
竹之内先生は、5年前に育児と介護に苦労しながら実験補助者雇用制度に応募したものの、初めて応募した際は不採択だったそうです。申請書類を記入していると、このような大変な状況

で働いても良いのかと辛い気持ちになったそうで、申請してもだめだろうと2回目の申請は諦めていたそうです。ところが、上司に推薦してもらい応募したところ採択され、以降3期に渡り利用されているとのこと。制度を利用する前は、育児や家事の時間を削って研究活動にしても大幅に遅れるような状況、自分や家族の体調不良、周りに同じような状況で相談できる人もおらず、家族に大きく負担をかけ、常に罪悪感があり、母として、教員として、妻として、娘として、全ての立場で自分



はダメだと感じ、自尊心が著しく低下していたと思返されました。一転、制度を利用してからはデータ収集を補助者の方をお願いしたことで、

保育園のお迎えはほぼ定刻通りに行け、家族の時間が持てるようになり、子供、家族のストレスや負担も減りうまく回るようになったそうです。研究も「これでいいのだ」とアイデンティティを再構築でき、効率的に教育や研究に取り組むことができるようになったとのことで、この制度なくして今の私はないというほどこの制度は大変有難かったとのことです。一方、経験から感じたこととして、搾乳場所がなくトイレで搾乳をした経験から環境がもっと整えばと感じたこと、教育と研究では研究が重視されるが、教育とバランスよく評価してほしいと思うこと、子育て中の方と繋がるネットワークがあればいいと思うこと、どれだけ説明しても実際に経験した人でないと理解してもらうことが難しいと感じること、ワークライフバランスを考慮した働き方の事例の紹介があればいいと思うこと、ワークライフバランスをとりながら頑張っている女性研究者が本制度や表彰のように、何らかの形で認めてもらえる機会が増えればさらに良いのではないかなど意見を述べました。



その後、女性教員懇話会を代表し、豊島 文子先生（ウイルス研究所）が懇話会について説明し、楯谷 智子先生（白眉センター）が懇話会からの実験研究補助者制度についての意見を述べました。「応募期間が短い」「申請書類を半年ごとに用意するのが大変」「雇用期間6ヶ月では短すぎて人を雇いにくい」「選考基準の明確化」「男性も利用しやすいようにホームページなどイラストや色など配慮してほしい」などの意見がありました。次に、王 柳蘭先生、鈴木 咲衣先生（白眉センター）が女



性研究員の生きづらさを集めたボードを紹介し、意見にならない生きづらさの声に寄り添う制度作り、空気作りに活かしてほしいと述べました。

続いて、伊藤 公雄推進本部支援室長の進行で、山極 壽一総長からお話がありました。山極総長は日本社会の問題は、育児と家庭の問題は「その家庭の問題」としてしまうことだと述べ、公的に、地域社会、職場が口を出していかなければいけないのではないかと考えを示しました。総長も研究室で子育て中の女性と一緒に長らく働いていたそうですが、彼女にしかできないことがある

から続けてもらわないと困ると思ったし、彼女も周囲の期待があったから決心した。周囲がそのように持っていないといけないと述べました。また、育児中には責任のある仕事を任せられないというが、責任ある仕事を責任持ってやるという社会のコンセンサスがあればサポート体制もできていこうし、本人も仕事を続けられると思うと述べました。また、伝統的な常識を変えるには生物学的な特性を補いながらいろんなモデルを作って、個性からある程度の普遍性へと舵を切らないといけないと語りました。そして、制度を変えていくためには個別的な意見をいっぱい集めてこれはできる、これはできないとしたほうがうまくいくと思うので、今回のフォーラムは具体的な事例や要望を知る大変いい機会であると述べました。その後、参加者から多くの質問や意見を頂き、回答しました。

最後に、伊藤推進本部支援室長が、男女共同参画推進センターを活用してもらい、個別の事例やいろいろな課題を共有するしくみができればいいと思いますと締めくくり、フォーラムを終了しました。



平成 28 年度 1 期研究・実験補助者雇用制度の利用者が決定しました。

平成 28 年度 1 期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、18 名（女性 12 名、男性 6 名）の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは

出産・育児・介護等で、十分な研究・実験時間がとれない研究者に対し、研究又は実験業務（注：教育関係の業務は支援対象外）を補助する者の雇用経費を負担します。募集は、年 2 回（6 月、12 月）です。本事業は、女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請できます。

連載：研究者になる！－第55回－

さよならイキイキ・モデル

人文科学研究所・准教授 石井 美保

女性研究者への応援冊子ともいうべき『たちばな』という媒体に、「研究者になる！」という連載タイトル。この条件での執筆となると、何とはなしに、「研究も家事も育児も、大変だけど毎日充実しています！」という、ポジティブでエネルギー溢れる文章を書かなくてはならないような気がしてくる。こうした模範的なイメージを、ここでは仮に「イキイキ・モデル」と名づけた。仕事と家庭生活を両立し、イキイキと輝いている女性研究者像である。

でも待てよ、と思いとどまる。この冊子の主な読者層が若手の女性研究者だとしたら、そうしたモデルを提示されるのは、ちょっと息苦しくなることではないか。ちょうど、「女性が輝く日本！」といった上からの掛け声に、息苦しさを感ずると同じように。切れ目のないキャリア、自己点検・評価、論文執筆に学会発表。家事に育児に介護。私たちの周りはずでに、身動きのできないほどの「マスト」項目で埋まっている。この小さなエッセイの中でまで、イキイキ・モデルを奨励しなくてもよいだろう、と思うことにする。

私の専門は文化人類学である。女性研究者のおかれる状況は、理系か文系かによって随分変わってくると思うが、文系の中でも文化人類学は、長期のフィールドワークが必須という点で特殊だといえる。大抵の学生は、博士課程在籍時に一年ほどの現地調査を経験する。私の場合、2000年前後に通算15ヶ月間ほど、ガーナの農村で調査を行った。研究テーマは精霊祭祀や呪術といった地域の在来宗教と、多民族社会における人々の関係性である。精霊を祀る司祭の家に居候させてもらい、宗教実践に関する調査を進める傍ら、村人の生活を知るために農地や森の中を歩き回った。

大学院博士課程といえば、年の頃は26歳前後。同年輩の友人知人はそろそろ結婚していくお年頃である。電気や水道のない村で、ときにスクールに叩かれ、マラリヤ熱に罹りつつ、呪術や儀礼について学び続ける日々。そんな私の元に、「私たち結婚しました！」という、幸せいっぱいの写真付きハガキ（日本から転送されてき

た）が何枚となく舞い込んでくる。これはなかなか、シュールといおうか、哀愁を誘うといおうか、「私って一体…」という気持ちになる経験である。

そんな私もどうにか博士論文を提出し、学振PDの身分でアムステルダム大学に留学することになった。ここで私にとっての大問題は、留学期間が妊娠・出産時期とまるきり重なってしまったことである。おまけに、やはり人類学者である夫も同時期にインド留学が決まってしまった。仕方がないので、夫にはインドとオランダを往復してもらうことにして、オランダで出産してみることにした。結果としては、留学というよりも「産みに行った」というほうが相応しいオランダ滞在ではあったが、その中でも印象深い出会いはあった。アムステルダム大でポスドクをしていたマリンは、私と同じくガーナ研究者。まだ1歳に満たない娘を研究会に連れてきて、ガーナ人の旦那さんと交替であやしていた。当時40歳にして既に著名な研究者であったビルギットは、9歳の息子の母であり、持病を抱えながらの研究生活。息子の誕生日に大掛かりなパーティを催したことを嬉しそうに話した後、ほっと息をついて、「でも大変よ」と呟いていた。おそらくは妊婦の身だったからこそ、研究という枠組みを離れて何か通じ合えたように感じた瞬間を、今もときどき思い出す。

オランダで長女を出産し、その6年後に日本で次女を出産。この十年ほど、二人の娘を調査地に連れていく「子連れフィールドワーク」を敢行中である。というと、調査地でも仕事と育児をこなす超イキイキ・ライフを実践しているようであるが、そうではない。何かと抜けている母を心配する子らに「ついてきてもらっている」というのが実情である。こんな風に、ときにジタバタ、ときにヨロヨロと過ごしているうちに、定年を迎えることになるのだろうか。いずれにしても私にとって、「キャリアも家庭も！」という無限のループからしばし逃れて、何者でもない自分のあり方を見直せるのは、やはりフィールドにいるときなのかもしれない。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>